ながやと

渋谷区立長谷戸小学校
令和2年5月号
校長 佐藤 公信

今こそ「生きる力」を発揮するとき

副校長　望月 伸司

学校から子供たちの姿が消え、教室から笑い声が聞こえなくなって2か月が経ちました。ニュースでは、毎日、感染者数が報じられ、その増減に国民全体が注目しています。ステイホームが合言葉となり、自分の命と他者の命、社会を守るために、ソーシャルディスタンスが重視されています。

いったい、半年前にこのような世界を誰が予想できたでしょうか。半年前ならば、まるで映画の中の話だと思ったでしょう。しかし、新型コロナウイルスは現実のものとして、今、容赦なく世界を襲っています。

「学校の役割とは何なのか」。臨時休業が続く中で、我々の自問自答は続いています。この4月から全面実施された新学習指導要領の総則に次のような言葉があります。「**複雑で予測困難な時代の中でも、児童一人一人が、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓ひらき、未来の創り手となることができるよう、教育を通してそのために必要な力を育んでいく**」。これからの学校教育の目指す一つの答えはここにあります。子供たちにこのような「未来を生きる力」を育てるために、我々教員は力を尽くしていかなければならないと思っています。しかし、その「未来」はいつか来る何十年後の未来というわけではありませんでした。このコロナ禍の今も、その一つの未来の姿なのです。

子供たちに、ただ理想を語っても、それは絵空事でしかないでしょう。「こんなふうになりなさい」と上から言っても、聞き流すだけでしょう。今、医療従事者の皆様や社会インフラを支える皆様をはじめとして日本中の多くの人々が、もてる力を尽くして、この未曽有の危機に立ち向かってくださっています。そして、我々は、その姿に、勇気と希望をもらっています。私たちも教育者としての責任を果たす姿を通じて、子供たちに自ら範を示していきます。

「**複雑で予測困難な、この新型コロナ感染の危機の中で、教職員一人一人が、社会や学校教育の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、よりよい教育を実践し、切り拓き、これからの未来を生きる姿勢を自らの身をもって子供たちに示していく**」

本校の教職員（そして渋谷区の教職員）は、今、このような心構えで、できる限りの教育を進めようとしています。思考停止をしている教職員は一人もいません。タブレット端末を利用して子供たちとどのようにつながるか常に思いを巡らし、児童の姿を思い浮かべながら日々の課題を練り、学校再開に備えて、どのように授業を進めるか何度もシミュレーションし、教材研究をする毎日です。もちろん、システム上、現時点でできないこと（同時配信授業など）もあり、もどかしい思いをすることもありますが、それに代わる方法はないか、実現の方策はないか、みんなで知恵を絞っています。

休校期間が 5 月 31 日まで延長されました。保護者の皆様に引き続きご負担をかけてしまうこと、そして何より、子供たちの心身の状態を、とても心配しています。しかし、何より大切な子供たちの健康を優先した上での決定です。どうかご理解ください。心配なことや学習の進め方として分からないことは、どうぞ学校にご連絡・ご相談ください。

子供たちが太陽のまぶしい日差しに目を細めながら、笑顔いっぱいに登校する日を信じて学校は準備を進めます。今後とも、皆様の、ご理解と御協力をどうかよろしくお願いいたします。